

---

# 鎮魂歌をうたって

柴田直志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

鎮魂歌をうたって

### 【Nコード】

N1294B

### 【作者名】

柴田直志

### 【あらすじ】

魔法少女のバッファロー美穂、女子高生の梅乃実さくら、前科1犯の陶芸家・権堂トリアンプ、天才泌尿器科医・剣ヶ峰龍之介の4人による、新感覚ドタバタラブコメディ！

### 第39話 謀略

「前回までのあらすじ」

レーサーを目指して上京した陸堂潤一郎は、ひよんな事からアパートの隣に住む美人女子大生・鬼子と交際することになった。しかし鬼子は何者かによって屈強なボディビルダーへと変貌させられ、ステロイドの過剰摂取により絶命してしまう。復讐を誓った潤一郎は、宅配寿司店にてデリバリーのバイトをしながらスロット三昧の気休な日々を送っていた。

そんなある日、彼の元に一通の手紙が届いた。

「大学から留年通知が届きました。どういう事ですか？今週末に帰ってきなさい」

それによって潤一郎は歌手になるという夢を思い出し、毎日カラオケに出掛け腕を磨いた。

時は流れ、五年後。逞しく成長した潤一郎は鬼子の仇を討つべく旅に出た。

道中、様々なライバルたちと壮絶な闘いを繰り広げ、何度も傷つきながら持ち前の明るさで困難を乗り越えていく。

そしてついに悪の王者、薔薇兄貴ことダニエル長尾と対峙した。

しかしながら実力差はあまりに大きく、薔薇兄貴の徹底したセクハラによって身も心もボロボロにさせられてしまう。

屈辱にまみれ、半ば自暴自棄になった潤一郎。そんな彼のもとに、三人の男が現れる。それはかつて、潤一郎が法律を盾にして一方的に叩きまくったライバルたちだった！

「きみは一人じゃない、俺たちと一緒に戦おう！」

強力な仲間を得た潤一郎。今度こそ薔薇兄貴を倒すべく、彼は再び立ち上がったのだ………！

牛乳屋の安東、新聞拡張員の中寺、元市議会議員で現在はフリーターのジャクソンを従え、潤一郎はとうとう悪の根拠地である県営N市団地へと到達した。辺りはドライアイスでも焚いたかのように霧が立ち込めていて、そこかしこで野焼きをした匂いがする。日は既に翳り始めており、もう間もなく街は闇に飲まれてしまうだろう。「おいおい、旦那。あんまりいきり立つと、上手くいくもんも上手くいかねえぜ?」

安東が潤一郎の肩を抱いて言う。伸び放題の髭が潤一郎の頬に突き刺さり、血が流れていく。平静を装ってはいるがやはり、先の闘いで牛乳三リットル一気飲みを敢行した影響は如実に現れているように、鼻から口にかけて二本の白い筋が垂れていた。

「そうでごわすよ、軍曹殿。ここは一つ、腹ごしらえでもしたらどうでござすか?」

いつの間にもやら潤一郎の股座に首を突っ込み、肩車をしながら中寺が言った。左手にはいつの間にかコンビニの袋が握り締められていて、中には大量のアルミ鍋入りキムチゲが入っている。いずれも賞味期限の切れた廃棄品で、プラスチック蓋の向こうに不健康な色をしたブタバラ肉がこちらを睨みつけていた。

それにしても

潤一郎は辺りをもう一度見回した。おかしい。あまりに静か過ぎやしないか。先ほどからそれが気になって仕方がない。団地の影から何者かがこちらを窺っているような、そんな気がしてならないのだ。

彼らの目的はあくまで奇襲だ。相手と真つ向からやりあったところで、こちらはたったの四人。相手は選りすぐりの兵士を投入してくるだろうし、まともにもやりあつたら到底勝ち目はない。これまでの道程は確かに、極力連中に気付かれないう鳴り物や電飾の使用は控えてきた。けれども少なくとも十八名の幹部クラス隊員を倒してきた潤一郎たちの存在を、彼らが知らないはずはなかった。

「うにゅー。ダメダメでゴンザレスー。ご主人様だったらすっかり上の空で候」

ひとり物思いに耽る潤一郎の頬をつついて、ジャクソンがそう言った。潤一郎は即座に彼の小汚い横っ面を張り倒し、昏倒する彼の腹部を全力で何度も蹴り上げた。彼はどす黒い血を大量に噴出しながら断末魔の叫び声を挙げ、二度三度痙攣したかと思うとそれつきり動かなくなつた。

「なあ、お前ら。少々静か過ぎるとは思わないか」

潤一郎は振り向いて、安東と中寺にそう尋ねた。

瞬間、彼は眼を疑つた。

安東と中寺が全裸にされた上に和からしを塗布され、昏倒しているのである。特に安東は持病のイボ痔に深刻なダメージを受けたようで、口から泡を噴いている。中寺もあらゆる粘膜部分を痛めつけられているようで、もはや意識はなかつた。

「酷え……一体誰がこんな仕打ちを！　こんなやつてないよ！」

潤一郎は絶叫し、二人の亡骸に取りすがつた。壮絶な闘いを経てようやく分かり合つた仲間たち。潤一郎は彼らを心から信頼し、彼らもまた潤一郎を信頼していた。そこには拳を交えた者同士にしか到底理解し得ない友情があつたのだ。その友情がいま、蹂躪されたのだ。

「いやー、傑作傑作。まさかこんな手に引つ掛かるなんて、そいつらも随分情けないねえ」

不意に背後で、誰かが言った。

「てめえ……最初からこのつもりで……」

「あら、失礼しちゃうわね、ご・主・人・様？　最初に手を上げたのはあんたの方でしょうに？」

口元を拭いながら言う男は、紛れもなくジャクソンだった。いつの間にか全身タイトの男たちを従え、残酷な微笑を浮かべている。凍てつくような視線で潤一郎を見つめる彼に、もはや数分前までの面影はなかつた。

「アタイがどうして市議会議員を辞めるハメになったか、まさか知らない訳じゃないわよね？ あんなに条件の良い仕事をタダで棄てるほど、アタイ馬鹿じゃないわよお？ ねえ？」

子供を諭すように言うジャクソンに、全身タイツが雄たけびを上げて同調する。ジャクソンは満足げに頷くと、それまで纏っていたパンテイスッキングを引き裂いた。

「さあて、そろそろ始めましょうか？ いつまでも遊んでいられるほどアタイも暇じゃないのよね」

「ま、待て！ 一つだけ教えてくれないか……」

半ば呆然としながら、潤一郎は言った。ジャクソンは片方の眉を吊り上げ、大きく溜息をつく。

「一つだけ、なんてケチなこと言わないで、全部教えてあげよっか？ アタイは元々東関東ボディビル競技振興促進会出身なのよ。その時のコネクションで議員になって、【市内の小学校にうさぎ小屋を作ろう基金】を横領しちゃったのよね。ううん、もちろん東ボデ競振会の秘密予算としてね」

「な、なんて卑劣な野郎だ……。お前のせいで一体何人の小学生が失望したと思っっているんだ！」

「あら、随分な言い草ね。うさぎだなんて、そんなのペットシヨツプに行けば幾らでも見られるでしょう？ 大体ガキどもが最後まできちんと世話をすると思っつて？ 最終的には用務員の仕事が増えるだけなのよ。だったらアタイたち東ボデ競振会でプロテインでも買ったほうが有効じゃなくつて？」

「市民の血税は、てめえらの筋肉の為にあるんじゃないやねえ！」

「まあまあ、よく言うわねえ。消費税と煙草税しか収めてなくせに。あなたの住民税は一体誰が払っているのかしらね？ ああ、可笑しい。言っておくけれどね、アタイらにはこれ以上プロテインなんて必要ないの。集めた金で買ったプロテインは全国各地の小学校に配って、子供たちの成長促進に役立てているのよ。一時の楽しみに過ぎないうさぎ小屋なんかより、余程子供たちの為になっている

とは思わないかしら？」

「それは詭弁だ！」

「詭弁ですって！ わかったような口を利かないで頂戴！ 貴方は一体どれだけの税金が無駄に使われているか知っているの！？ 誰も使わない橋！ 利用客のないホール！ やたら豪華な公用車！ 接待と称しておっパブ通い！ そういう物にはっかかり金を使って、肝心の教育対策なんて何一つじゃない！」

「お前たちはそうやって、教育を盾に自分たちの組織拡大を狙っているだけじゃないか！」

「もう、いいわ。貴方にこれ以上言っただって何もわからないでしょうから……。さて、そろそろ始めませんか？ 適度に運動しないと筋肉に良くないわ」

ジャクソンはそう言って、静かに構えを取った。全身タイトの男たちも黙って勝敗の行方を見守るつもりらしい。手にしていたソーセイジャフランクフルトを地面に置き、じつと腕組をしてこちらを見ている。

やるしか、ない

潤一郎は意を決し、サハリン式上段袈裟構えを取った。辺りはもうすっかり闇に包まれていて、湿気を孕んだ大気が肌にまとわりつく。改めてジャクソンを見ると、以前に戦ってからそう長い時間が経っていないにも関わらず、随分と実力を上げたように感じられる隙がまったくない。強烈な威圧感がある。おそらくはこの時のために、先の闘いでは力をセーブしていたのだろう。

先に動いた方が、負ける。

長い沈黙の中で、潤一郎はそう確信していた。スピード勝負ならば完全に負ける。ジャクソンはパンストを引き裂いたことにより、それまで押さえつけていた大腿筋を解放した。遠目からでも獲物を狙うようにびくびくと痙攣しているのがわかった。スピード、脚力に関しては多分、歯が立たない。なんとしてもジャクソンに先制攻撃を仕掛けさせ、上手くカウンターを狙う以外に勝機はないだろう。

だがジャクソンもさるもの、潤一郎の狙いを完全に読んでいる。自分から仕掛けてくる様子はまったくくない。それどころか潤一郎を挑発するようにニヤニヤと気持ちの悪い笑みを浮かべている。

仕方ねえ……

潤一郎はカウンター狙いを棄て、自ら動き出すことを決めた。タイミングさえ完璧ならば五分に持ち込めるだろうという、根拠のない自信だけが虚しく、彼の頭を過ぎる。

指先に力を込め、呼吸を整える。額を脂汗が落ちていく。一瞬のミスが命取りだ。

「DEYAAAAAAAAAAAAAAAAA！」

潤一郎は吼えた。大気が震え、木の葉が弾ける。そして次の瞬間、わき目も振らずにジャクソンへと飛び掛って行った。

つづく

## 第44話 誘惑

「前回までのあらすじ」

レーサーを目指して上京した陸堂潤一郎は、ひよんな事からアパートの隣に住む美人女子大生・鬼子と交際することになった。

しかし鬼子は何者かによって屈強なボディビルダーへと変貌させられ、ステロイドの過剰摂取により絶命してしまう。

復讐を誓った潤一郎は、宅配寿司店にてデリバリーのバイトをしながらスロット三昧の気俤な日々を送っていた。

そんなある日、彼の元に一通の手紙が届いた。

「大学から留年通知が届きました。どういう事ですか？今週末に帰ってきなさい」

それによって潤一郎は歌手になるという夢を思い出し、毎日カラオケに出掛け腕を磨いた。

時は流れ、五年後。

遅しく成長した潤一郎は鬼子の仇を討つべく旅に出た。

道中、様々なライバルたちと壮絶な闘いを繰り広げ、何度も傷つきながら持ち前の明るさで困難を乗り越えていく。

そしてついに悪の王者、薔薇兄貴ことダニエル長尾と対峙した。

しかしながら実力差はあまりに大きく、薔薇兄貴の徹底したセクハラによって身も心もボロボロにさせられてしまう。

屈辱にまみれ、半ば自暴自棄になった潤一郎。そんな彼のもとに、三人の男が現れる。それはかつて、潤一郎が法律を盾にして一方的

に叩きまくったライバルたちだった！

「きみは一人じゃない、俺たちと一緒に戦おう！」

しかしそれは巧妙に仕組まれた罠だった！

熱々釜揚げうどん対決後、仲間になった元市議会議員・ジャクソンは何と！敵のスパイだったのだ！

ジャクソンによって安東、中寺が無残にも命を奪われてしまう。

激怒した潤一郎はジャクソンに闘いを挑むが、力を解放したジャクソンの前に手も足も出ない。

もはやこれまで、と覚悟した潤一郎に思いも寄らぬ援軍が駆けつける。

なんと、それは警察であった。ジャクソンを横領の疑いで逮捕すべくやって来たのだ！

抵抗を続けるジャクソンだったが、逆に公務執行妨害までもが加わり万事休す。

彼は最後の手段として手製の爆弾に火をつけ、警察もろとも自爆を試みた。

だがその刹那、団地屋上に待機していたSAT狙撃班によって、ジャクソンは射殺されてしまう。

「き、貴様と戦えてよかった」

命の灯火が消える瞬間、戦友に戻ったジャクソン。度重なる仲間の死に打ちひしがれる潤一郎。

もはや気力も尽き果てようとしていたその時、潤一郎の中で眠っていた何かが目覚める……！！

「じ、これは一体……」

潤一郎は今、黄土色になっていた。髪が、肌が、瞳が、黄土色になっていた。

しかし、それ以外に別段、変わったところはなく健康そのものである。力が漲ってくるとか、興奮状態になって我を忘れるとか、特にそういった事象も発生してはいない。ただ単純に、全身が黄土色

一色になっただけで、何も変わったことはない。ごく普通の潤一郎がそこに、いた。

「き、君はもしや伝説の！」

ふと、背後でそんな叫び声が出た。振り向くとそこに、白衣をまとった初老の男性が立っていた。爆発した髪、牛乳ビン眼鏡、両手の三角フラスコ。どこからどう見ても科学者に違いなかった。

「やはり……間違いはない。これは伝説の……」

科学者は潤一郎の全身を指先で撫で回し、何度もそう呟いていた。節くれだった細い指が身体じゅうを駆け回り、その度に何ともいえない快感が電撃のように走る。恍惚とした表情でただ、潤一郎は身を任せていた。けれどもそれは、本意ではない。彼には心に決めた女性がいる。だのに身体は疼いてしまう。それが悔しくて仕方がなかった。身体は弄ばれても心までは譲らない。そう思ってはみるが、否応なしに襲いかかる快楽の波に飲まれた彼にとつて、それはもはや決意とは言えないものであった。

「君！ すまんがちょっと一緒に来てくれ！ 詳しい説明は後じゃ！」

科学者は潤一郎の両手を握り、そう言った。同時に心臓が大きく脈打ち、血流が激しくなるのがわかる。潤一郎はただ、黙って頷くだけで精一杯だった。もはや、先ほどの決意も崩れ去ろうとしている。身も心もこの男性に捧げてしまいたいという甘い欲望が、彼の胸の中で渦巻いていた。

「さあ、まずはリラックスしてくれたまえ。なあに、何にも怖いことなんてありませんよ」

科学者は潤一郎を部屋に招きいれると、慌しくコーヒーを淹れながらそう言った。卓上には様々な実験器具が並び、薬品と何か焦げ臭いような匂いがする。潤一郎はその中に、科学者のオトコの匂いを確かに嗅ぎ取っていた。灰皿で燻る吸殻に、脱ぎ捨てられた白衣に、カップの中で熱を失った紅茶に、彼は胸の奥底が締め付けられるようなものを感じ取っていたのだ。

「おや、緊張しておるのかね？」

落ち着かない様子で部屋を見回す潤一郎に気付いたのか、科学者がそう尋ねた。潤一郎が静かに頷くと、科学者は腰をこごめて彼に顔を近づける。それだけでもう、充分だった。潤一郎の心臓はまたも急速にビートを早めていく。あと数センチ、ほんの少しでも身を乗り出せば、科学者のかさついた唇がそこにある。けれどもその距離が、潤一郎には永遠にも似た距離に感じられた。

「楽にしている結構、何ならそこに寝転がっていたって構わないよ」  
科学者はそう言っ、窓の辺りを指差す。見ればそこに、折り畳み式の簡易ベッドがあった。真っ白なシーツ、枕、毛布はいずれも乱れに乱れていて、科学者が確実に毎日そこで寝起きしていることがわかる。潤一郎は頬を赤らめながら、考えた。自分が何を望んでいるのか、何を選びたいと思っっているのか、何を選ぼうとしているか、わからなかった。ただ、その内のひとつが、もうすぐそばにある、手を伸ばせば掴めるものであるということだけは漠然とわかった。

「まあええ。とにかく楽にしてくれ。夜はまだ長いんだから…」

耳元で囁いた科学者の言葉がまるでゼリーののように、まとわりついて離れなかった。

つづく

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1294b/>

---

鎮魂歌をうたって

2011年1月15日02時42分発行